

やまたらけ

YAMADARAKE

FEBRUARY

No.21

2007

山の民と狩猟

11月15日、猟期が始まる。初猟の日、仕事を休んで猟に出かける人もいるほど、猟師はこの日を心待ちにしている。

早川町には現在、40人の猟師があり、10人程度のグループが4つある。中には、単独で罠や犬を使った猟をする人もいるが、週末には数人が集まり、セコ猟と呼ばれる犬を使ったグループ猟で、猪や鹿を獲る。

猟の仕方は、地域によって様々だが、早川町内で行われているグループ猟に、大きな違いはない。セコと呼ばれる人が、犬を連れて山に入り、犬が獣を追っているか、獣がどの辺りを逃げていくか、無線でマグサに伝える。マグサとは、獣が犬に追われて逃げる道のこと、犬に追われて獣が逃げてくるのをマグサで待ち伏せする人のこともそう呼ぶ。犬に追われると、猪は山の中の平坦地か谷間で犬と格闘し、ブーブー威嚇しては逃げる。鹿は走って熱くなった体を冷やすことと、川の中を長い脚で巧みに走って臭いを消し、犬の追跡をかわすために川に下りる。獣によってマグサは変わるうえに、マグサをはった場所に必ず獣が逃げるとは限らない。セコはその場の状況をよく読んで、必要ならばマグサに移動の指示を出す。しかも、状況は刻一刻と変わり、悠長に考えている暇はない。命がけで逃げる獣を、そう簡単には獲れないのだ。猟師はそんな獣との知恵比べをおもしろいと言う。

今回、「かのし会」の猟師たちが、「ニクの日」と称して年内最後の猟を行う12月29日を追った。

かのし会「ニクの日」ドキュメント

12月29日、くもり。風が強く、今年一番の冷え込みだ。午前8時30分、早川町西山地区の猟師のグループ、かのし（この方言で鹿のこと）会のメンバーが、かのし小屋に集まってきた。この日集まったのはメンバー12人のうち8人。年齢は下が27歳から上が75歳までと幅広い。猟犬を引き連れ、肩には銃がかけられている。そして、一様に緊張と期待の入り混じった表情をしている。



■河原にはるマグサ。どこから来てもいいように、神経を集中する。獣に気取られない（気付かれぬ）ようにじっとしているので、余計に寒さが身にしみる。



■眠い目をこすりながら相談。細かい地名や猟師仲間の隠語が多く、会話の中身を理解するのは難しい。

集まるとまず、どこの山で猟をするか、誰がセコをやり誰がどのマグサに着くか、ほとんど長年の勘で獵場を決める。およそ15分で獵場が決まり、すぐに移動だ。一回戦は鹿を狙う。セコは荒居さん。犬は荒居さんのマールだ。犬に追われると、鹿は走って熱くなった体を冷やすためと川の中を長い脚で巧みに走って

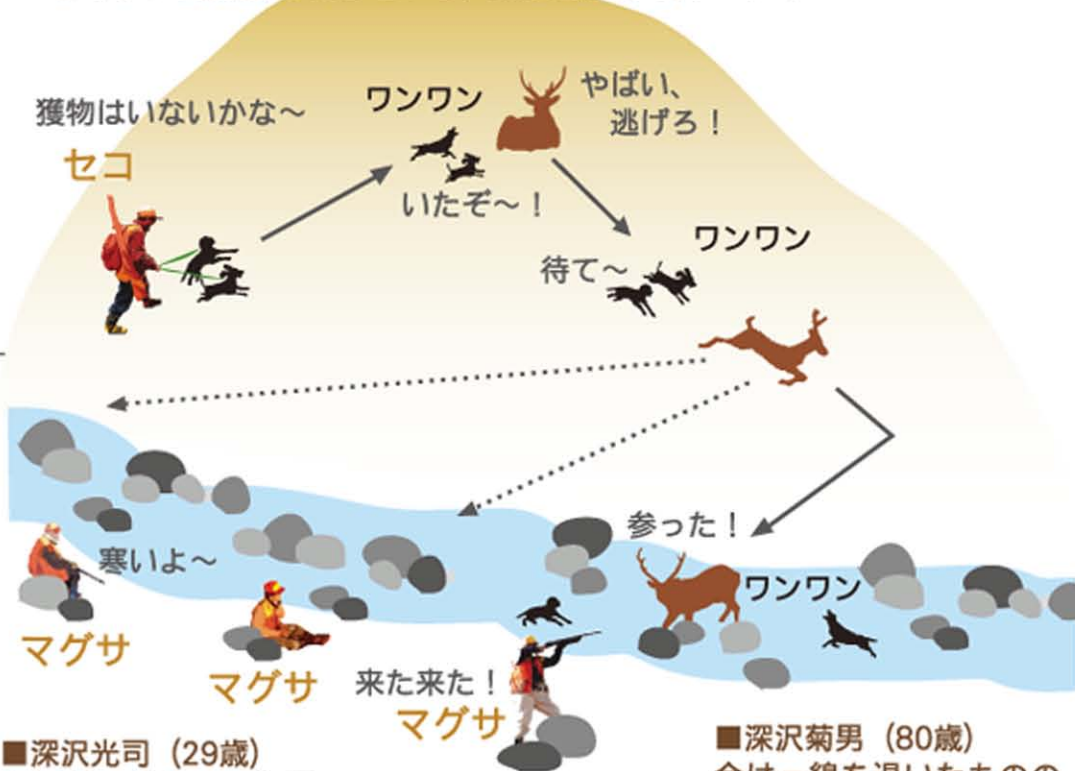
満を持して
エース犬ペロの投入

再びかのし小屋に集まった後、今度はさつきより少し北の、川をはさんで反対側の山を獵場にする。今回

臭いを消し、犬の追跡をかわすために川に下りてくる習性がある。4人のマグサは河原へ下りて鹿を待つ。午前9時頃、それぞれが位置につき、セコの荒居さんからマールを放したという無線が入る。猟の始まりだ。鹿が追われて川に下りてくるまで、4人のマグサは河原でひたすら待つ。猟が始まって30分、山を歩いている荒居さんから「新しい足跡は見当たらない」との無線が入る。山を変えようとの声も上がるが、もう少し様子を見てみることにする。だが、犬は獣の匂いを捕らえられない様子で、一向に鳴き声は聞かえてこない。午前10時、仕方なく山を変えることになった。

セコ猟の仕組み

かのし会の猟は「セコ猟」と呼ばれるもの。犬を連れて山に入り獲物を追いつく人を「セコ」、獲物の逃げ道で待ち伏せをする人を「マグサ」と呼ぶ。セコは犬とともに獲物を探す。見つけた獲物を犬が追い始めたら、何がどの方向に逃げたかなど、マグサに状況を伝える。マグサは獲物があるまでじっと我慢。きたらとっさに鉄砲を構えて、ドン！



■深沢光司（29歳）
白根館の跡取り。抜群の狩猟センス。早川町猟友会希望の星。

■中村正治（43歳）
物静かな猟師。マグサでの捕獲率は、かのし会NO.1。

■深沢菊男（80歳）
今は一線を退いたものの、猟のときは無線で仲間にエールを送る。



■犬の表情ががらりと変わる。引き締まったいい顔付きだ。これから山に入ることが、ちゃんとわかっているようだ。

は猪も狙って、二人のセコが計8匹の犬を連れて山に入る。鹿を追わせたら右に出る犬はいない、エースのペロも投入だ。すると、犬を放して5分経つか経たないうちに、河原にはついていたマグサの荒居さんから鹿を仕留めたとの無線が入る。獲れる時はこんなもの。山を変えて正解だったようだ。犬達はまだまだ元気なので、

■深沢洋志（27歳）
白根館の三男。数ある（？）失敗談も、その愛嬌で笑いに変える。

■荒居薫（65歳）
狙った獲物は逃さない。冷静沈着なかのし会の名スナイパー。

■深沢一比兒（57歳）
かのし会の宴会部長。決めゼリフは「なんちゅう、うまいど〜か〜」

■湯村重照（59歳）
奈良田の里温泉勤務。食堂で出される獣肉は、この人の戦利品。

■深本梅次郎（75歳）
猟師歴50年の大ベテラン。グレーの長髪がトレードマーク。

■早川優太（23歳）
肇さんの甥っ子。最近入会したばかりで、猟の素質は未知数。

■深沢孝治（43歳）
今は町外に住んでいるが、猟の季節になると足繁くふるさとに通う。



う頃、何かが跳ねるように軽やかに川の上流から下りてくる。来た。鹿だ。体長1mくらいだろう。1本角のオス鹿が、50mほど離れた所にいる。もう十分、射程内だ。鹿に向かって背を向けていた一比兒さんはひらりと体をひるがえし、軽く足を開いて立つ。銃を構える間もなく、ドーンという大きな爆発音が響き渡り、体が衝撃で後ろにのけぞる。銃口の

先には、ぐったりと倒れる鹿の姿。ついさっきまで生きていたとは思えない。あつという間の出来事に、一比兒さんは「獲ったね」と満足げな顔を見せた。

一犬、二足、三鉄砲

早川の猟師の間には、一犬、二足、三鉄砲という言葉がある。猟に大事なものは、まずその嗅覚と脚力で獣を追う犬、その次に犬を山に連れて行く人の足、そして最後に獣を撃つ鉄砲の順という意味だ。とにかく、優秀な犬がいれば、猟はほぼ成功する。だが、相手は生き物だ。当然、思い通りにならないこともある。経験したことのない展開にもなる。ベテラン

■日本と早川における猟の歴史

私たちの祖先は、狩猟と農耕で生きてきた。食料を得るため、農作物を守るため、猟は生活の一部として欠かせないものだった。江戸時代に銃を使うようになるまでの長い間、罾や手槍、撲殺具のみで獣を獲っていた。

早川町奈良田では、西山からの道が整備される昭和26年以前、動物性たんぱく質は山で獲る以外なく、カモシカ、ウサギ、猪、鹿、熊、猿などを獲った。特に奈良田には、「熊ピラ」と呼ばれる木を組んで作った罾があり、他に類のない罾の技術を有していた。獲れた獣は貴重な動物性たんぱく質だったので、物々交換により集落で分け合い、生でも食べたという。残った肉は、火で炙って乾燥させたり、味噌漬けにしたりして保存した。また、西山温泉の湯治客に肉を売っていたとの話もある。

江戸時代後期、全国的に野性鳥獣の毛皮や内臓が市場で価値を持ち始め、猟で現金収入を得る人も現れる。結果、ウサギ、キツネなどの良質な毛皮の小動物は乱獲され、生態系は乱れていく。政府はそれに危機感を抱き、明治末期より鳥獣保護の方針を打ち立てた。現在の狩猟は鳥獣保護と有害鳥獣駆除を目的とし、鳥類28種、獣類20種を狩猟可能と法律で定め、生態系の回復と維持に努めている。

■名犬の条件

肇さんの犬、ペロは、鹿を追う名犬だ。他の犬とどう違うのか。名犬の条件を聞いた。名犬とは、まず、鼻が利くことと足が速いこと。これ、当然。さらに良いのは獣を追いつく鳴くこと。鳴いてくれると、猟師もどこを獣が逃げているのか判って、すごく助かる。そして、意外なことに、ちょっと臆病な方がいいらしい。勇敢すぎると、獣に飛びかかってケガをしたり、獣を噛み殺したりしてしまうのだ。広い山の中で噛み殺された獣を探すことはほとんど不可能に近いので、猟は失敗ということになってしまう。

そして、ペロの一番すごいところは、鹿の逃げ道を先回りできること。普通の犬は、鹿が通った後を素直に追いかけて行くが、鹿の逃げ足の方が速いので、追いつけない。それを知っているペロは、「直路（すぐ）」と呼ばれるコース取りでジグザグに逃げる鹿の先に回るのである。優れた嗅覚だけでなく、獣の逃げる音を捉える聴覚も冴える一流犬にしかねない技だ。

■猟師の高齢化と獣害問題

現在、猟友会に登録している猟師は全国でおおよそ13万5千人、そのうちの40人が早川町民だ。昭和50年には早川町に165人いた猟師も、昭和60年には104人、平成8年には67人と、年々減少の一途をたどっている。年齢別に見ると、現在、一番若い人が27歳、最高齢はなんと86歳。20代、30代、40代はそれぞれ2人ずつしかおらず、逆に70代以上は8人もいる。50代から60代が主戦力で、高齢化は否めない。数十年後の早川町に、もはや猟師はいないかもしれない。

近年、獣が人家周辺に出没し、田畑を荒らすというニュースをよく聞く。その原因を作っているのは人間自身という話もあるが、山に暮らす人にとって、獣の被害は生活に関わる深刻な問題だ。現在、鳥獣被害があった場合は、役場から猟友会に駆除の要請をし、猟師によって駆除される。もし猟師がいなくなれば、出没する獣の数はますます増えていく。田畑は荒らされ、人間は狭い地域で、獣に怯えながらの生活を強いられるかもしれない。

普段あまり実感することはないが、獣と隣り合って暮らす私たちが、野生動物と共生し、安全に暮らしていくために、猟師はなくてはならない存在だ。



厳冬の時期をじっと耐え、春の到来を知らせてくれる福寿草。中世の風情を残す赤沢宿では、2月中旬から、福寿草の群落を見ることができます。赤沢宿の街並みを歩き、昼食はおいしい手打ちそばを食べて、春の息吹を感じてください。ツアー当日は地元の人のご案内いたします。

日時／平成19年2月25日(日) 11時～15時頃
集合場所／角瀬トンネル横広場
参加費／会員1,500円、非会員1,800円
※昼食代込
定員／30名(要申込、締切2月19日)

～申込先～
やまだらけ編集部
☎0556-45-2160



運が良ければ、福寿草と節分草の共演が見られるかもしれません。

★マナーを守って観察しましょう。地元の人達による保全整備にご協力いただき、この風景を次世代に残していきましょう。

3/4 冬の田舎体験第三弾 奈良田の里で味噌仕込み



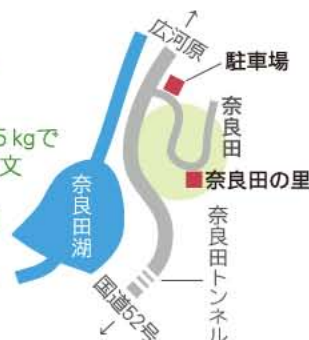
奈良田の里主催、田舎体験第三弾は、冬の早川の風物詩「味噌仕込み体験」です。味噌を作ったことはありますか？作り方は意外と簡単。煮て、潰して、混ぜるだけ。早川産大豆を原料に、早川町ならではの作り方で、お味噌を作ってみましょう。

当日は餅つきも行います！体験後は、自慢の温泉にゆっくり入って、日頃の疲れを癒して下さい。

日時／平成19年3月4日(日) 午前10時～
集合場所／奈良田の里受付
参加費／1人1,500円+味噌代
昼食代、温泉入浴料付き。味噌は5kgで2,000円。グループで1つ以上ご注文下さい。

定員／15組(要申込、先着順、締切2月25日)
備考／エプロン、タオルなど持参。
汚れても良い格好でお越し下さい。

←昭和30年頃の味噌仕込み。集落共同の大釜で大豆を蒸す。早川集落にて。



～申込先～
町営奈良田の里温泉
☎0556-48-2552

まだぎりぎり間に合う(かも)

2月12日は、田舎体験第二弾・こんにゃくづくり体験！

午前10時スタート、参加費3000円、昼食はいのしし鍋、詳しくは奈良田の里まで



～申込先～
南アルプス県野鳥公園
☎0556-48-2288

野鳥公園主催自然観察シリーズ 春の山野草観察と小鳥の巣箱づくり

春は鳥たちの繁殖の季節。これから子育てをする小鳥たちのために、巣箱を作ってあげましょう。野鳥公園のスタッフが指導してくれます。できた巣箱は野鳥公園内に設置します。公園内の自然観察路でカタクリ、ダンコウバイ、ヒトリシズカなどの可憐な山野草も観察します。

日時／平成19年4月7日(土) 午前10時～午後3時頃
集合場所／野鳥公園駐車場
参加費／大人800円、こども500円
持ち物／お弁当(特製みそ汁をこちらで用意します！)
歩きやすい靴、汚れても良い服装で
定員／20名(要申込み、締切4月2日)
※巣箱を持ち帰りたい方は、別途1500円を材料代として頂きます。



↑巣箱の中にいる子どもにエサを運ぶシジュウカラ

生活の知恵・西山地区の保存食 寒干大根はいかがですか

標高約800メートルの寒暖の差を利用した「寒干し大根」作りが、早川町西山地区で最盛期を迎えています。地元で採れた大根を輪切りにし、ゆでてくしに刺す。約2カ月間干して冷凍乾燥させる。温泉客にも好評な、この時期だけの西山地区の郷土食です。煮物などに使われ、独特の甘みが特徴。ふるさとの味を、ぜひお試しください。

料金／1袋500円(送料別途200円)

内容／110g

数量／20袋限定

発送／4月中旬以降申込順に発送いたします。

気候に影響される商品のため発送が遅れることもありますので、ご了承ください。

締切／3月上旬(20袋限定のため無くなり次第売り切れ)



～上記商品に関する注文・お問い合わせ先～

やまだらけ編集部 ☎0556-45-2160 (商品と一緒に請求書をお送りしますので、指定の金融機関へお振り込み下さい。)

第22回現代美術「こうふ展」に 地球と遊ぶ芸術家 木村崇人さんが出展！

早川町に移り住んではや一年。やまだらけ18号でもご紹介した早川町在住の「地球と遊ぶ芸術家」木村崇人さんが、甲府市の藤村記念館で、5名のアーティストと合同で展覧会を開きます。

今回のテーマは「空間の味解(みかい)」。明治期の山梨を代表する擬洋風建築・藤村記念館の歴史的な空間を、木村さんがどんなアプローチで変容させるのか。ぜひ会場にお出かけ下さい。

会期／3月10日(土)～25日(日)

毎週月曜日、木曜日は休館

時間／午前10時～午後5時

場所／甲府市藤村記念館

入場料／無料

問合せ／現代美術「こうふ展」実行委員会事務局

甲府市教育委員会文化振興課

☎055-223-7324

みんな
見に来てね～！

藤村記念館



←愛・地球博での
展示風景(2005年)
※今回の展示内容
とは異なります。

早川サポーターズクラブの会費の一部を積み立て実施している、早川町の新たな魅力づくり。昨年度実施した三里地区、赤沢集落に続き、今年度は硯島地区での散策路整備が始まっています。



■2コースを踏査しました！

今回の散策路整備は、硯島観光協会との協働事業。6月から協議を重ね、10月には、ヴィラ雨畑から老平集落を経由して、硯の里キャンプへ行き、馬場集落へ下りて来るルート进行调查。急傾斜の茶畑で育つ雨畑茶、硯の里キャンプ場周辺から見る富士山や雨畑湖の眺めもなかなかのものでした。

11月には、硯匠庵横のつり橋を渡り、雨畑湖の対岸を歩き、本村へ行くルートを調査しました。こちら、見神の滝、七面大明神、雨畑硯など、興味深い見どころがピックアップできました。

今後は、コースの手入れ、看板や標識の設置、ガイドマップの作成などを順次進めていく予定です。



皆さんから頂いた会費の一部で
硯島地区の散策路整備が進んでいます。

かのし会の中心メンバー、深沢守さんと深沢肇さんにお話を伺いました。

獲物が獲れば、それで猟が終わり、というわけではない。仕留めた鹿を川から引き上げ、解体作業に入る。鋭いナイフを使って皮をはぎ、内臓を取り出し、肉を部位ごとに分ける。肉は猟師が分け合って持ち帰り、日持ちしない内臓類はその場で料理される。それをつまみに、いよいよ宴会だ。

そこで猟師たちは、山の神様に感謝し酒を回し飲み、武勇伝を語り、失敗談を明かす。これは「絵語り」と呼ばれる大事な猟の一部で、そこで得た情報はその後の猟に活かされる。鹿を2匹獲ったこの日の宴会は大いに盛り上がり、猟の一日は夜遅くまで続いた。そんな席で、いろんな話を聞かせてもらった。

かのし会ができたのはいつごろですか？

肇：俺が猟を始めた頃は、特に決まったグループはなくてね、声を掛け合って、行ける人と猟に行ったっちゃうわけ。猟師の数が多くて、ベテランの猟師はわざわざ獲れないかもしれない初心者を連れて行かんだよ。俺は下湯島の若い連中4～5人で、あまり使えない犬を連れて猟に行っていたわけ。そのとき、まぐれで鹿を獲ってから、これはおもしろいなってことで猟を続けようだけど、昭和60年頃かな、守さんと行き始めて、いろんな人に声をかけよううちに、今のメンバーのかのし会ができたっちゃうわけ。

■深沢肇（52歳）
早川町役場勤務。鉄砲も罾もこなす万能ハンター。しかし、かつては漁師になりたくて家出をしたことも。

猟のおもしろさは何ですか？

守：猟はうまくいかない時のほうがおもしろい。どの犬がどの辺で獣を追っているか、その時々状況によって、全然違う展開になるからね。獣と知恵比べをして、追っている時が一番興奮するね。毎回違って、そのたびに勉強になるし。苦労してでも獲りたいものを獲りたいじゃないね。簡単に獲れるじゃおもしろくないね。

犬が大事だと聞きますが、犬を選ぶ秘訣はありますか？

守：生まれて7ヶ月くらい経たんと、名犬になるかどうかわからん。いくら親が良くて、その子どもが全部良いとは限らんしね。素質があれば経験を積ませるだけ、あとは犬自身が勉強し、名犬になったりならなかったりだよ。

猟へのこだわりはありますか？

守：かのし会としては、1発で獣を獲るように、徹底して若いのに教える。2発、3発撃てると思うと、人間、どうしても甘えちゃうからね。犬が獣を完全に止めていて、撃つのに余裕がある時だったら、できるだけ首を狙って撃つよ。宴会で、自慢できるしね。

それから、獲った肉は全部食べないかん。そうせんと、山の神様に申し訳ない。たまに犬が山で獣を噛み殺しちゃったり、ケガして逃げた獣が山の中で死んじゃったりして、見つけられん時、ほんと山の神様



■山の神に捧げたお神酒を回し飲む。このときばかりは一同神妙な顔つき。いつもはコップだが、今日は人数が多いのでお椀。

に申し訳なくて、どうしたもんかと思うよ。あとな、思うんだけど、スーパーで肉を買えるのは、それを殺してさばいている人がいるっちゃうこんだろ。それを知らんで肉を食べるじゃなくて、知って食べて、ありがたみを感じんといかん。

肇：そうだな。野生の動物を獲ってかわいそうだと言う人もいるんだけど、家畜として育てられる牛や豚は、生きる喜びも辛さも知らずに殺されていくわけ。野生の動物は、人間との勝負に負けた結果の話じゃないね。食べられるだけの牛や豚の方がよっぽどかわいそうじゃねえ。

■深沢守（58歳）
秘湯として名高い温泉旅館「白根館」の館主。山を熟知する経験豊富なかのし会のリーダー。



■読者の声

●昭和20年3月7日から昭和32年3月22日まで笹走で育ちました。今回の記事は当時を思い出させてくれました。（柏市、Mさん）

編集部：笹走は日当たりもよく気持ちのいい所です。早川往還が町外への主要道だった頃は、町の玄関口でした。しかし今は、過疎高齢化が著しく、町内でも存続が危ぶまれる集落の一つです。当時は、どんな様子だったのでしょうか。

●実に詳細に取材されていて、立派だと思います。山村でしかも長い町ですから多角的に取り上げる必要があるかと思いますが、それも出来

ていて素晴らしいと思いました。（甲府市、Aさん）
編集部：ありがとうございます。前号ではこれまでと少し趣向を変え、町が抱える深い悩みを読者の方々と共有してみたいと考えました。

●山のふとこに抱かれた、野趣に富んだ良い所でした。地元の季節料理や特産品をもっと紹介して欲しいです。（富士市、Wさん）

編集部：早川町にお越し頂いてありがとうございました。やまだらけも来年度（23号）からマイナーチェンジし、内容のさらなる充実を図る予定です。今後のやまだらけに乞うご期待！

■NEXT やまだらけ

22号特集（3月下旬お届け）

「桜前線北上中！」

南北に長い早川町。町の入り口から最奥の奈良田まで、その距離は約25km。そして標高差は500m。そんな地形の特徴を感じられるのが桜の咲く季節。早川町では、3月下旬から4月下旬まで、約一ヶ月に渡って桜が楽しめるのです。次号では、早川町の桜スポットと満開の時期を一挙ご紹介。この春は、早川町で毎週花見だ！

山で食料を調達し、火をおこすことも料理することも難くこなす猟師さん。頭の回転も速く、たくましく、とにかくかっこよかったです。例えどんな状況に陥っても、猟師さんと一緒にいれば、乗り越えられる気がします。そして、山の神様への感謝を忘れない姿に、山に生き、自然と暮らす人間の本来の姿を垣間見ました。どうやら猟師さんに学ぶべきことが、まだまだたくさんありそうです。

山を現けば宝の山
【やまだらけ】

発行元／フィールドミュージアム運営委員会
住所／山梨県南巨摩郡早川町薬袋430 〒409-2727
電話／0556-45-2160 ファクシミリ／0556-45-2268
ホームページ／<http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/fm/>